

令和三年 七月八月の俳句

与謝 蕪村

菜の花や

月は東に

日は西に

高野 素十

ひつぱれる

糸まつすぐや

甲虫

松尾 芭蕉

荒海や

佐渡によこたふ

天河

菜の花畑が見わたすかぎりひろがっている。いままさに春の一日がくれようとしていいる。淡い月が東の空にのぼっている。西を見ると、夕陽がしずもうとしている。

(季語 菜の花 春)

逃がさないようにかぶと虫に糸をつけて遊んでいる。かぶと虫は力持ちだ。その力の強さが、糸がまつすぐに張ったという描写でよくわかる。

(季語 かぶと虫 夏)

秋の夜、目のまえは日本海のあらう海だ。海のおこうのほうを見ると、白く美しい天の川(銀河)が佐渡のほうまでのびて、まるで橋のように横たわっている。すごく雄大な景色だ。

(季語 天河 秋)

「子ども版 声に出して読みたい日本語」草思社
「入門俳句事典」国土社